001　アビ目アビ科　アビ

撮影　久留野　明　　L-61Cm

世界の野鳥でペンギンに次いで
脚が最も身体の後ろについている種。
水に潜り魚を捕らえる冬鳥。
1990年に十三干潟で 淀川では2003年に
守口市のわんどで観察されています。
主に沿岸部で観察されている。
やや上向きのくちばし、細長く見える身体つき。
水に潜り魚を捕らえている。

002　アビ目アビ科　シロエリオオハム

撮影　加藤隆司　　L-65Cm

アビと似た暮らしをしている冬鳥。
1986年まで広島 県の瀬戸内でアビ漁が行われていたそうです。
アビや シロエリオオハムが水に潜 り、
イカナゴを追い立てるとその群を追いかけて、
鯛 などが集まってくるのを捕 らえていたそうです。その漁の主役を務めていた。
冬羽は茶色がかっています。

003　カイツブリ目カイツブリ科　カイツブリ

L-26Cm

ガマやマコモに浮き巣をかけて
子育てをするカイツブリ。
雛を背中に包み、泳ぐなんて
とても可愛いですね。
尾羽がほとんど見えないくらい短く、
足は後ろのほうについていて、直立
して干潟を歩くこともあります。

004　カイツブリ目カイツブリ科　ハジロカイツブリ

L－30Cm

寒い季節にだけ観察されています。
2008年には、2月に5羽観察されました。
やや上に反ったくちばしと赤い目が特徴です。
大きさはカイツブリより大きく
カンムリカイツブリより小さい。

005　カイツブリ目カイツブリ科　カンムリカイツブリ

L－56Cm

カイツブリ目で最大。
たいていは冬鳥なのですが、1991年に4羽の
雛を連れたつがいが、十三干潟で確認され、
以来夏でも6羽が毎年観察されていましたが
近年は3羽になっています。
ひげ面の夏羽が観察できる南限が十三干潟です。
かなり長い時間潜水します。
自身の頭より大きな魚を捕らえて、飲み込むこ
ともあります。

006　ペリカン目ウ科　カワウ

L－81Cm

羽は濡れ羽色、光線の当たり方によっては
緑がかって見えたり、紺色に見えたりもします。
くちばしの付け根がウミウとの識別点。
魚群探知機の無かった頃は、魚の群を知らせ
る鳥として、カワウを祀った神社もあったそう
ですし、30年くらい前までは絶滅が心配され
ていましたが、20数年前からから、局地的に、
大繁殖して、害を及ぼすようになりニュースで
取り上げられています。
淀川でも4000羽くらいは居てそうです。
鵜飼に使われるのはウミウ。

００７ペリカン目ウ科　ウミウ

L-84Cm

鵜飼に使われているのでお馴染みです。
捕獲された後、人に馴れるのです。
カワウは人に馴れないそうです。
日本海側では西日本でも留鳥。
太平洋側では東北北部で留鳥。
瀬戸内や太平洋側では冬鳥。
淀川では冬に観察されています。
飛んだとき翼がやや後ろにあり、
くちばしの付け根まで羽毛があり
皮膚がむきだしのカワウと区別できます。

００８　カモ目カモ科　コハクチョウ

撮影　藤波不二雄　　L-120Cm

淀川では約１０年おきに観察されています。

いずれも滞在は短く、一日限りなので迷い込んだものと考えられます。
稲作を行う環境が少ないため、
コハクチョウの越冬地としての条件が満たされていないからだと思います。

００９　カモ目カモ科　ツクシガモ

撮影　坂本龍介　　L-53Cm

長崎のハウステンボスへ出かけたときに見かけたのがこの鳥との出会いでした。
藤波さんからは淀川でも観察したことがあると聴かされていたので、何時会えるかと楽しみにしていたものです。
2006年12月に十三干潟の周辺で観察できました。
赤いくちばし、マガモに似た配色、大きめの身体、他の野鳥と見間違えることはありません。

０１０　カモメカモ科　オシドリ

淀川での観察例は、秋に雌を見かけることが多い。
2001年春、雄が泳いでいて十三干潟周辺で撮影できました。
雄が雌をしっかりと守るので仲の良い夫婦の代名詞になっています。

L-45Cm

０１１　カモ目カモ科　ヒドリガモ

赤茶色の頭の頂にクリーム色の模様がある冬鳥。さっさとペアーになる個体も居ますが、雌の数が雄よりも少ないのでしょう、数羽の雄が一羽の雌を取り囲むようにして冬を過しています。
鳴き声は、雄が口笛のようにピューと一声づつ区切って鳴きます。雌はしわがれ声でガッガーと鳴きます。

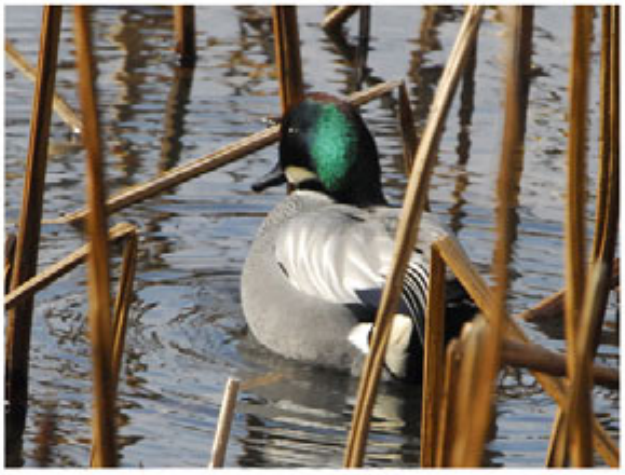
L-49Cm

０１２　カモ目カモ科　アメリカヒドリ

以前には十三干潟でも毎年観察されていましたが近年はあまり観察されなくなっています。
ヒドリガモに似たヒューとかピューと鳴きます。
行動はヒドリガモに混じって同類のようです。
緑色の模様が特徴です。
この映像を写すため香露園浜まで出張しました。

L-48Cm

０１３　カモ目カモ科　ヨシガモ



L-48Cm

目印は、ナポレオンの帽子のような頭。
もうひとつは、羽が垂れ下がったお尻。
冬に観察できるが淀川では、希にしか
観察できません。
あまり流れの無い池やわんどが、お気
に入りの場所のようです。
背中の白さ、頭頂部の赤茶色、結構
おしゃれです。

０１４　カモ目カモ科　オカヨシガモ

Ｌ－５０Ｃｍ

地味な配色の冬に見るカモ。
淀川ではヨシガモよりもオカヨシガモを多く
見かけます。城北ワンド周辺はとくに多く見
かけますが、柴島再生干潟でも観察されてい
ます。
雄雌いっしょにいることが多く、
微笑ましく思います。

０１５　カモ目カモ科　シマアジ

撮影　藤波不二雄

L-38Cm

３月の渡りの頃にコガモに紛れて観察される旅鳥。
ケエとやや濁った声で鳴きます。
秋の渡りではコガモの群に紛れて観察されることが
ありますが、コガモに似ていて遠目では確認しづら
く、やや長いくちばしでコガモとの違いを見分けて
います。
背中の羽毛が横にはみ出すのもシマアジの特徴。

０１６　カモ目カモ科　トモエガモ

撮影　松井永喜　　Ｌ－４０Ｃｍ

冬に少数が見られるカモ。十三干潟で12月ラジオ番組収録中に飛立つ群を仲間が撮影してくれました。雄だけの群でした。
雌は地味な茶色基調ですが、背中から斜め横に垂れ下がる白い線の羽毛が雄と同じなので他の雌ガモと区別できます。

０１７　カモ目カモ科　コガモ

Ｌ－３８Ｃｍ

日本のカモ類では最小、ピリッピリと鳴いています。冬鳥ですが中部地方の高原や北日本では夏をすごすものも居るそうです。
淀川では10月から5月半ばまで観察されていますが秋の雄の羽色が、雌とよく似ています。このように雄が地味な羽色をしているときにはイクリプスと呼ばれています。

水浴び

０１８　カモ目カモ科　マガモ

L-59Cm

冬鳥を代表するカモ。
雄は青首と呼ばれ、狩猟の対象になり人気があります。
しかし最近では夏でも見かけるし5月頃には雛を連れたお母さんマガモを観察できます。
どうやらアイガモとの交雑の可能性もありそうです。

０１９　カモ目カモ科　カルガモ

カルガモは雄雌ともによく似ています。
どうやって繁殖の相手を見つけているのでしょう。声、態度それとも我々人類と違う光の波長で見ているため観察者には分からない違いが分かっているのでしょうか。
雛はお母さんだけで育てます。

Ｌ－６１Ｃｍ

０２０　カモ目カモ科　オナガガモ

カモ類で最長ですが雄の尾羽が突き出しているためでマガモのほうが目方がありそうです。雄の白い首が目立ち、１０月半ばから３月半ばまで、地味な配色の雌を連れて仲良く泳いでいます。

Ｌ－７５Ｃｍ

０２１　カモ目カモ科　ハシビロガモ

ショベルのようなくちばしが特徴。
マガモと配色が似ていますが、よく動いて水面を回りながらプランクトンを食べています。
十三干潟周辺では12月の半ば１週間ほど滞在します。おそらく溜め池など淡水域の、少し汚れた水面を好むようで、服部緑地の池には数多く集まって来ます。

Ｌ－５０Ｃｍ

０２２　カモ目カモ科　オオホシハジロ

L-55cm

冬、稀にホシハジロの大群に紛れている少し大きな、白っぽく見えるホシハジロに似ているカモ。
大抵は、北米からメキシコあたりが主な生息域。
飛来はする固体は少なく、迷い込んだものと思われます。
1994年のホシハジロの写真の中に記録されていました。

０２３　カモ目カモ科　ホシハジロ

2002年までは十三干潟の周辺に約7000羽が集い、昼間は居眠り状態で過し、夕方沖へ採餌に飛立っていました。
現在は7000羽の群は走行するモーターボートに分断され、淀川下流域に散らばり越冬しています。
頭は赤褐色、眼は赤くヨーロッパからモンゴルあたりまでの広い範囲で繁殖しています。

０２４　カモ目カモ科　スズガモ

L－４５Cm

黒く見える丸い頭、後頭部の垂れ下がる羽毛のあるキンクロハジロとの識別点。
1993年の晩秋。数多くのスズガモが大阪キタのビル群を背景に、舞い上がった瞬間です。この年を最後に、スズガモの大群は十三干潟では観察されていません。少数のスズガモが散らばって越冬しているだけです。

０２５　カモ目カモ科　キンクロハジロ

黒白の身体、眼が金色、垂れ下がる後頭部の羽毛。銀色のくちばし。ちょっと生意気なスタイルの冬カモ。よく見かけるけれど大きな群にはならないようです。

Ｌ－４０Ｃｍ

０２６　カモ目カモ科　ホオジロガモ

撮影　藤波不二雄

Ｌ－４５Ｃｍ

２０年ほど前には、十三干潟付近に越冬するカモで最大勢力だったのがスズガモでした。その数８０００羽くらいは居ました。スズガモの群に混じって、一緒に行動していたのがホオジロガモ。その時が最初の出会いでした。１９９２年からはホシハジロが大勢を占めるようになり、スズガモは少数が観察されるだけになっています。
ホオジロガモは淀川に姿を見せなくなっています。

０２７　カモ目カモ科　ミコアイサ

撮影　藤波不二雄　　L-42Cm

１９９８年１０月　ミコアイサの雄が１２羽、十三干潟上空を舞いました。白黒で眼の周りが黒いのでパンダガモとも呼ばれます。
またいずれの日にかミコアイサが干潟に、立ち寄ってくれたらと願っています。

０２８　カモ目カモ科　ウミアイサ

撮影　藤波不二雄

１９９４年６月　梅雨の晴れ間の早朝。TV局の取材が入った。夜半までは大雨でしたが、晴れ間が広がり取材決行となりました。
十三干潟のすぐ沖に見慣れない水鳥を見つけました。図鑑で調べウミアイサの幼鳥と判明しました。以降の観察例は人づてに聞かされたのみです。

L-55Cm

０２９　チドリ目カモメ科　ウミネコ

日本近海に幾つもの繁殖地があり、夏に見かけるカモメ類のほとんどはウミネコ。
鳴き声はミャーオとかミャー、尾に黒い帯があり成鳥のカモメ類では唯一の種。
冬、ユリカモメにまぎれて行動することが多い、くちばしは黄色。

L-47Cm

０３０　チドリ目カモメ科　カモメ

空中にいるのがカモメ、手前の頭の黒いのがユリカモメ、カモメの翼長は身体の割りに長くて1.2Mあります。
くちばしは黄色くて上下とも先端部に黒い模様があります。
春にはキーユキーユキイキイキイと大声で鳴きます。

L-43Cm

０３１　チドリ目カモメ科　セグロカモメ

L-61Cm

２００８年１月の河川レンジャー観察会に現れたセグロカモメ。ユリカモメの群が２００羽ほどその中にカモメやセグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコが行動を共にしていました。
魚の死骸を見つけると、眼から食べます。
オオセグロカモメにもセグロカモメにも下くちばしの先端付近に赤い点があります。成鳥の証です。
セグロと名がついていますが、実際は灰色に見えます。

０３２　チドリ目カモメ科　オオセグロカモメ

L-64Cm

セグロカモメと同日に撮影したオオセグロカモメ。背の灰色がかなり濃く見えています。他に違いと言えば大きさ以外には鳴き声オオセグロカモメは、キイーユと甲高く、セグロカモメはアオとかガガと聞こえます。
一度に両方を見れば、識別もし易く確実です。
近年はオオセグロカモメのほうが多く観察されています。

０３３　チドリ目カモメ科　ユリカモメ

L-40Cm

冬と春に頭の色が変わります。成鳥の、くちばしと頭が春に段々黒くなってきます。まるで別の種類のようです。
餌を見つけると一羽がギイーと合図を送るとたくさん集まってきて餌を奪い合います。
京都では昔から都鳥として、冬の風物詩となっています。
小魚からパンくずまで何でも飛びながら食べています。

ルアーが絡んだ

０３４　チドリ目カモメ科　ズグロカモメ

２０００年に十三干潟で初観察されました。一見するとユリカモメに似ていますがやや小さく、くちばしと脚が黒いので区別できます。
性格は獰猛に見えます。脱皮直後殻の柔らかいカニを襲い一撃で絶命させ、引きちぎって食べることが多い。
世界中で約三千羽が生息していると言われる希少種です。

L-32Cm

０３５　チドリ目カモメ科　クロハラアジサシ

毎年飛来してくるとは限らない、だから出会えればうれしい野鳥です。赤い脚とくちばし、コアジサシに比べて幅の広い翼、蝶の雰囲気でヒラヒラ飛びながら急に降下して餌をすくい取っています。
ここ３年間は毎年飛来しています。
餌はゴカイや水棲昆虫のようです。

L-26Cm

０３６　チドリ目カモメ科　オニアジサシ

以前から目撃情報が寄せられていましたが、映像で捕らえられたのは初めてでしした。ウミネコよりも大きいアジサシが居たとは驚きですね。もちろん日本で観察されたアジサシの仲間では最大です。
餌は主に魚で、ダイビングをしたりクロハラアジサシのようにくちばしを少し開いて下くちばしを水面に刺して直進して餌を捕らえます。

撮影　小松弘明

L-53Cm

０３７　チドリ目カモメ科　アジサシ

１９９７年９月、十三干潟に降りたアジサシの群。外洋の時化を避けて淀川に避難してきたものと思われます。その数５０羽ほど。
もっと以前に対岸の中津浜で、２００羽を超える群が一斉にダイビングしていた光景を思い出しました。
もう一度見たい、観察者の皆さんにも見て欲しい出来事でした。

L-36Cm

０３８　チドリ目カモメ科　コアジサシ

１９９５年ごろまでは毛馬の閘門から伸びた突堤で３００番くらいがコロニーを作り繁殖していましたが、現在は枚方市の工場空き地にコロニーを移しています。
２羽でキリッ、キリッと鳴き合いながら飛翔して雄がダイビングして小魚を捕まえて、雌にプレゼントしているところです。
黒い頭黄色く先細りのくちばし、ダイビングしても水には潜りません。

L-24Cm

０３９　コウノトリ目サギ科　アオサギ

通常、淀川下流域最大の野鳥。大声でゴアーと鳴き威嚇します。
餌場を決めるとじっと動かずに魚が近づくまで待ちます。修業している僧侶に見立てられています。
自身の頭よりかなり大きなボラやコイを掴み取り大きく口を開けて飲み込みます。その様子を見ていると爬虫類を連想します。
昔言葉でアオは灰色、ルリ（瑠璃）はブルーを表しています。したがって灰色のサギ。

L-92Cm